華厳教学における「無礙」の解釈の問題点（一）

増田英男

これまで二回にわたり、弁証法との比較を通して、華厳無礙の本質的意味が、直接無媒介的な非過程的同時円成という点にあることを究明してきた。この点を踏まえた上で古来の華厳教学を再検討すると、その中に「無礙」の解釈においていささか疑問と思われる点がいくつか見出だされる。まずその具体的な実例として「主伴具足」の解釈を取りあげてみよう。

「主伴具足」は華厳教学において極めて重要な意味をもつ。即ち教判の面では例えば法蔵の『五教章』に、「若三乗頼耶識如来蔵法無我因中、有二六義名義一而主伴未レ具。若一乗普賢円因中、具二足主伴一無尽縁起方究竟也。」〔大四五、503a〕とか、「此一乗此一方説二一事一義一品一会等一時、必結二通十方一切世界一皆同二此説一(具二足)主伴一共成二一部一。……三乗等則不レ爾。但随二一方一相一説、無二此主伴該通等一也。」〔同484a〕などとある如く、主伴具足は三乗諸教に対して一乗円教たる華厳の立場を分つ極めて重要な特質とされており、また教理の面では、事事無礙の奥義を説く古十玄において、各門にそなわる十義の第八に「主伴依正」として立てられ、新十玄に至つて最後の第十門に「主伴円明具徳門」として掲げられ、十玄門全体を統べる総帰結とされている。さらに観法としては、教即観の立場から、右の十玄門なども教理たると同時に観法を兼ねるものであるが、別立の観法としても例えば法蔵の『発菩提心章』では、三重観に続く十門止観の最後に「主伴円備門」を立て、『妄尽還源観』では五止六観の最後に「主伴互現帝網観」を掲げて、いずれも観法の極致を示している。このように教判上からも教理上からも観法上からも、「主伴具足」こそは、多種多様の形で横説竪説せられる華厳無礙の思想の中でも、とくに重要な根本的かつ総括的究極的意味を担うものである。

では「主伴具足」とはどういうことであるか。まず大体の意味は一応次の如くであろう。即ち千差万別の事事物物が相互に幾重にも無礙無尽に相即相入しあう事事無礙法界におい

ては、一一の事物がそれぞれ他の全事物を完全に抱摂統一して全体の中心主体となるとともに、また逆に他の一一の事物に包摂統一せられてその周辺伴侶ともなる、つまりすべての事物が互に主ともなり伴ともなりつつ、その間何らの対立衝突も混乱矛盾もなく全く円融無礙であるということである。ところで問題はこの主と伴との入れ代りが、過程的時間的に相前後して現われるのか、それとも非過程的に同時に現成するのか、という点である。これをどちらに解するかによつて主伴具足の意味が全く違つてくる。即ちもしこれを過程的に解釈すれば、主伴具足は常識的にも解りやすい無矛盾的な単なる主伴交代となる。これに対しもしこれを同時現成として解釈すれば、主伴具足は常識を超えた矛盾的自己同一的な主伴互換となる。このように過程的交代と同時的互換という両様の解釈が区別せられるが、もし非過程的同時円成ということが華厳無礙の本質であるとすれば、事事無礙の極致を開示せる主伴具足の意味は、当然この後の解釈によつて理解把握せられなければならないであろう。

ところが古来の華厳教学の中には、どちらの解釈なのか曖昧なるのみならず、前の解釈すなわち過程的交代を思わせるような節が含まれているのである。そこで以下、法蔵の『探玄記』に記された主伴具足に関する文を中心として、その解釈の仕方を検討してみようと思う。即ちその巻一の第九顕二義理分斉一の条に、まず十玄門の名を連ね、以下蓮華葉を事例として順次に各門を解説して行くのであるが、最後の第十門「主伴円明具徳門」の下に次のような解説がある。「此円教法理無二孤起一。必眷属随生。下云、此華有二世界海塵数蓮華一以為二眷属一。又如二一方為レ主十方為レ伴余方亦爾。是故主主伴伴各不二相見一。主伴伴主円明具徳。」〔大三五、123c—4a〕（なお澄観の『華厳経疏』巻一〔同515c〕にもこれと同一の文が載つており、法蔵の『華厳経旨帰』〔大四五、594c〕にも同主旨の文が見える。また『探玄記』巻一の第五弁二能詮教体一の条にも、浅より深に至る十門最後の主伴円備門において、主経と眷属経との間の主伴具足が説かれ〔大三五、119c—120a〕、澄観の『華厳経疏』巻一にも、十処によつて経縁を説く段の最後に、遮那仏と余仏との間の主伴関係について「主主不二相見一、伴伴不二相見一、主伴伴主則互相見、……」〔同505c〕の文が見え、『随疏演義鈔』はさらにこれを詳説している〔大三六、27a〕。）

さてこの文の前半は、一つの蓮華が世界中の無数の蓮華を眷属としているように、華厳円教の法理は孤立的ではなく、必ず一切の法理を眷属として随伴しているということ、敷衍すればこの法界におけるすべての事物はどれも単独で現われるものはなく、必ず重重無尽の縁起につながる他の一切を眷属として伴なつているということを説いたものと解せられる。つまりAはBCDEないし一切を眷属として起り、BはAC

DEないし一切を眷属として起り、CはABDEないし一切を眷属として起る……という具合に、個個の事事物物がそれぞれ他の一切を眷属として現起しているということである。したがつてABCDEないし一切のそれぞれは、いずれも他のすべてのものを眷属として率いる主であるとともに、また他のすべてのものそれぞれの眷属として率いられる伴でもあるわけで、かくて個個の事事物物相互の間に無限の主伴関係が成立することになる。故に「一方主たれば十方伴たるが如く余方も亦しかり」ということになる。主伴具足に関する『探玄記』の文は、ここまでは一応非過程的同時現成の意味に解することができるが、問題はその次の「主主伴伴各相い見ず、主伴伴主円明に具徳す」の一文である。これを澄観の『華厳経疏』〔大三五、515c, 505c〕及び『随疏演義鈔』〔大三六、81c, 27a〕の釈によつて解釈すると次のようになる。即ち「一方が主たる時はその一方はどこまでも主であつて伴たることはできず、十方が伴たる時はその十方はどこまでも伴であつて主たることはできない。故に相関関係にあるものの一方が主たる時、他方もまた主であつたなら、双方ともにどこまでも主位を主張して互に衝突するから両者の関係は成り立たず、また一方が伴たる時、他方もまた伴であつたなら、双方ともに伴位に退いて発動しないからやはり両者の関係は成り立たない。即ち主と主、伴と伴は互に衝突あるいは乖離（かいり）して相関関係を現成し得ない。つまり『主主伴伴各相い見ず』ということになる。これに反し、一方が主たる時には他方は必ず伴となり、他方が主たる時は一方は必ず伴となるならば、双方互に衝突も乖離もせず、両者の関係が円満に成立する。即ち主と伴、伴と主の間にこそ持ちつ持たれつの相関関係が成立し得る。つまり『主伴伴主円明に具徳す』ということになる。」澄観の釈を論理的に敷衍すれば以上のようになる。この解釈の根底には、「主はどこまでも主であつて伴ではなく、伴はどこまでも伴であつて主ではない」という自同律ないし矛盾律に基づく二者択一的前提がある。この前提に立つ限り、一方が主で他方が伴である場合と、他方が主で一方が伴である場合とは同時には成立し得ない。したがつて主伴具足は過程的前後交代的にしか成立し得ないことになる。即ちこの解釈は主伴具足を「一切法は前後時を異にして交互に主となつたり伴となつたりする」というふうに過程的交代として解釈するものといわねばならぬ。

ところがこの一文にはまた別の読み方と別様の解釈がある。まず読み方であるが、それは「主を主とし伴を伴とすれば各相見ず、伴を主とし主を伴とすれば円明に具徳す」と読むのである。この場合でもこれを過程的主伴交代と解することもできる。つまり「主は主、伴は伴といつまでも固定していては相互無礙の関係は成立しないが、互に入れ代り譲りあ

つて主ともなり伴ともなつて行けば円満な関係が成立する」というふうに解釈できる。しかしこれを同時円成的な主伴互換と見る解釈も可能である。別様の解釈というのはこれである。即ち「主が主たる立場だけに執われ、伴が伴たる立場だけに執われていては一切法の間に無礙の関係は成立し得ない。主が主でありながら主たる立場を脱却して同時に伴でもあり得、伴が伴でありながら伴たる立場を脱却して同時に主でもあり得てこそ、一切法の間に重重無礙なる主伴互換の関係が同時円成する」というふうに解釈するのである。主伴具足に関するこのような解釈は法蔵の著書に多い。例えば『発菩提心章』に説かれる十門止観の第十主伴円備門の条に、「菩薩以二普門之智一頓二照於此普門法界一。然挙レ一為レ主一切為レ伴。主レ伴伴レ主皆悉無尽。不レ可二称説一。」〔大四五、654b〕とあるのは簡略で未だ意味がハッキリしないが、『義海百門』に説かれる差別顕現門の十義の第九定二主伴一の条に、「謂塵是法界体無二分斉一。普遍二一切一。是為レ主也、即彼一切各各別故是伴也。然伴不レ異レ主、必全レ主而成レ伴。主不レ異レ伴、亦全レ伴而成レ主。主之与レ伴、互相資相摂。若相摂彼此互無、不レ可二別説一切一。若相資則彼此互有、不レ可二同説一切一。皆由二即主即伴一。是故亦同亦異。当レ知、主中亦主亦伴、伴中亦伴亦主也。」〔同、632c〕とあるのは、明らかに上述のような同時円成的主伴互換を説くものと見ることができる。また『妄尽還源観』に説かれる六観門の第六主伴互現帝網観の条に、「謂以レ自為レ主、望レ他為レ伴。或以二一法一為レ主一切法為レ伴。或以二一身一為レ主一切身為レ伴。随レ挙二一法一即主伴斉収。……」〔同、640bc〕とあり、さらに善財童子が弥勒菩薩の前で見た重重無尽の大楼閣につき主伴互現を説いた後、六観門全体について、「此上所述六重観門、挙レ一為レ主。余五為レ伴。無レ有二前後始終一俱斉。随レ入二一門一即全二収法界一。……巻舒無礙隠顕同時。一際絶二其始終一、出入亡二於表裏一。初心正覚、摂二多生於刹那一。……即是海印炳現三昧門。」〔同〕と説くによれば、その非過程的同時円成的解釈たることはいよいよ明らかである。

以上の如く主伴具足は、古来の華厳教学において、過程的前後的な主伴交代と、非過程的同時円成的な主伴互換と、この両様の意味に解釈されているのであるが、この両様の解釈は決して混同さるべきではなく、また華厳無礙本来の意味からすれば、これはあくまでも同時円成的主伴互換として解釈せられなければならぬと思う。しかもこの問題は単に「主伴具足」だけではなく、古来の華厳教学の諸方面に現われているのであるが、それらについては次の機会に述べることとする。